

受験番号			

次の文章は『美術の窓』に掲載された、井上雅人氏による「ファッションとは何か」の中の「今、ファッションについて考える」の抜粋である。文章をよく読んで、問いに答えなさい。

私たちは、進歩や解放の後の、成熟した社会の、そのまた後の世界に生きている。これから発展していくことは難しいだろうが、かといって衰退していくと決めつけてしまうのもどうだろうか、という段階にいる。たとえ衰退したとしても、昔に戻るわけではないので、やはり、今までとは違う社会になっていくことに不安は覚えている。20世紀後半の人々のように、人類は前近代的で抑圧的な制度から解放されつつあるという、明るい歴史観のなかにはいない。

現在の歴史観は、ひとつの抑圧や束縛から解放されると、すぐさま別の抑圧や束縛に絡め取られてしまい、解放後が前より良くなったのか悪くなったのかも、前進しているのか後退しているのかもわからないといったものだ。しかも、社会どころか個人によって、絡め取られる抑圧や束縛も、それらをもたらす問題も異なってしまうことを皆が熟知している。

鷺田が文章を書いた今から30年前の世界では、まだまだ人類は進歩し解放に向かっているという神話が生きていたし、進歩と解放の結果として、個性的や多様になることは賞賛された。しかし21世紀の社会では、人々が多様であることはもはや前提で、多様性は否定されてはならないものだが、努力してなるものでもなくなった。人と違っていることは保証されていても、違うことが強調されれば、そこに残るのは孤独感であり、人と違っていることへの不安である。21世紀の人々が、人と違っていることより、人と同じことを指すのは、当然なのかもしれない。

ファッションは、自分が誰であるかを発信する方法でもある。ファッションは、個人と社会、身体と制度、文化と経済の問題でもあるが、アイデンティティとコミュニケーションの問題でもある。セイモア・フィッシャーが、「自分自身を着飾るときは、ある意味で、われわれは自画像をつくっている*1」と述べているように、ロバート・ロスが、衣服は「いやおうなくアイデンティティを表明*2」してしまうと述べているように、私たちは着ることで、アイデンティティを形づくらざるをえないし、伝えざるをえない。

しかしの問題は、ほとんどの場合、その自画像が、望んでいる自分と合致しないことだ。多くの人にとって、なりたい自分を自らの力で生み出すことなどできるはずもなく、それでいて、ネット社会に生きている以上、下手をして他者からの理不尽な攻撃を受けることは避けなければならない。そうすると、社会によってすでに用意されたステレオタイプを借用するのが一番便利で安全になる。その結果、他者と極端に違ってないことを求め、ナショナリズムやジェンダーといった誰もが理解可能なアイデンティティの帰属先を探し、いくつかパターン化された、他者にとってわかりやすい似たり寄ったりの自画像を描くことになる。

だとしたら、もはや服を着ることは、少しでも居心地の良い牢獄を選ぶことになってしまっているのだろうか。私たちにとって、着ることは主体的な行動になっていないのだろうか。ECサイトが充実して、実際に足を運ばなくても多種多様な服を買えるようになり、男性が女性の服を買うような

受験番号			

ことまで簡単にできるようになった。しかし、それで衣服は多様になったのかと言えば、200年前と比べたら、世界からはさまざまな衣服が消滅している。それを考えると、私たちはそもそも、着るものを選んでいるのかも疑わしい。今後、文化盗用の議論が進み、他文化の衣服や紋様を借用できないようなことになって、さらに選択の幅が狭まる可能性だってある。自分の帰属する集団が歴史的に所持してきた衣服しか着られなくなるのだとしたら、それは身分制社会と同じである。

多様性を理由に、人々の姿が固定されてしまうのは危険なことである。というのも、ファッションは、貧富、性、美醜の差を示す差別の体系でもあるからだ。衣服の固定は、差別が固定されることを意味するからだ。ファッションは抑圧や差別の構造をもたらすが、常にその構造を壊しては作り直す。ファッションが喜びや楽しみにもなるのは、絶え間なく転覆を繰り返すことによって、序列を入れ替えるからである。ファッションには、流動化させる力がある。

ファッションとは、精神よりも身体を、一貫性よりも変化を価値の中心におき、慣習や流行といった外部からの力に従って、自身を日々変化させることを良しとした世界観である。それゆえにファッションは、うわべだとか軽薄だとか言われるわけだが、そのおかげで私たちは簡単に違う存在に変化することができる。それは他者になれるということであり、他者になれるということは、自分以外の存在について想像するだけでなく、経験し思考することもできるということである。

自分以外の存在になることは、違う価値観へと渡り歩くことである。ファッションはありがたいことに、価値観を「スタイル」と呼ばれる美意識の体系に集約している。私たちそれぞれが、複数の美意識の体系へと移り続けるなら、社会や世界も移り変わり続けることだろう。多様性の名の下に、相互の無関心や不干渉が進んでいく世界であるからこそ、無遠慮に軽やかに境界線を超えていくファッションには、とても大きな役割がある。

*1；セイモア・フィッシャー『からだの意識』村山久美子・小松啓訳 1979 誠信書房 128ページ

*2；ロバート・ロス『洋服を着る近代 帝国の思惑と民族の選択』平田雅博訳 2016 法政大学出版局 19ページ

出典：井上雅人 「ファッションとは何か」 編集・発行人 一井義寛
『美術の窓』生活の友社 2025 第44巻 第4号 pp.102-103

問1. 下線部①の「問題は、ほとんどの場合、その自画像が、望んでいる自分と合致しないことだ。」とはどのような理由から述べられているのか、200字以内でまとめなさい。

問2. 上記の文章を考慮し、あなたの考える「現代のファッション」について、具体例を示し400～500字で述べなさい。